

提 言

小児保健研究における多職種連携

真部 淳（北海道大学大学院医学研究院小児科学教室教授）

皆様、あけましておめでとうございます。昨年 6 月、札幌市で行われた第 71 回日本小児保健協会学術集会で会頭を務めさせていただいた真部淳です。その節はお世話になりました。この学術集会は「小児を中心に置いた社会の実現」をテーマに行われましたが、実に多くの分野からたくさんの皆様にご参集いただきました。それを受けて今日は表題のような内容で提言をさせていただきます。

私は小児科医です。大学医学部と大学院、そして大学病院に勤めておりますので、私の仕事は小児医学の教育、研究、診療ということになります。今回、この学会への入会資格を調べてみましたところ、医師、歯科医師、薬剤師、保健師、助産師、看護師、管理栄養士、栄養士、臨床心理士等心理職、保育士、教諭、養護教諭、栄養教諭など、小児保健分野における活動に従事している個人とあります。私の知る限り、このような広範な職種が対等の立場で参加する学術団体は、ほかにはないと思います。この各々の職種の人たちが、私のように、教育、研究、診療などさまざまな活動を行っているわけですから、その総体は凄まじい種類の活動となると思います。このような人たちがこの小児保健協会を成立させているのです。驚きませんか。

一方、これを私の日常の業務に照らしてみると、大学病院の小児科では、上記のほとんどすべての職種の人たちが患者の診療に関わっていることがわかります。実際、北大病院の小児病棟で毎週 30 分行われる多職種カンファレンスには、医療ソーシャルワーカー、看護師、医師、保育士、リハビリ、薬剤師、退院調整看護師、院内学級教諭、チャイルドライフスペシャリスト、学生など、実にさまざまな人たちが参加して個々の患者の主に非医療的な問題を話し合っています。このカンファレンスの有用性はもちろん高いですが、同時に参加する人々への教育効果も計り知れません。

今回、私は学術集会を主催し、素晴らしいことを多く体験しました。口演、ポスターセッションでの討論も有益なものでした。ただ、欲を言うと、議論しているメンバーは同じ職種に限られる傾向もあり、それでは勿体無いと思いました。私から皆様に提言するというのもおこがましいですが、次の機会には（全国規模の学術集会に限らず、各地方の研究会でも）、ぜひ、他（多）職種の皆さんと話をし学び合うことを目的の一つにいただけると良いと思います。

